

図書館という空間が もつ力



登別市立図書館長

わたぬき
綿貫

とおる
亨

昭和38年、埼玉県川越市生まれ。55歳。

埼玉と東京の図書館勤務を経て、平成23年2月より登別市立図書館長に就任。日本図書館協会が、司書の中でも中核を担う司書として認めた『認定司書』の一人。

影響を受けた一冊は『おろしや国酔夢譚』（井上靖著）。

豊かな時間を 図書館で



皆さんは、図書館に足を踏み入れたとき、時間の流れが変わったような錯覚を抱いたことはありませんか。

『図書館は魂をいやすところ』といわれます。図書館は、日々の暮らしの中で、自分を見つめ直すことのできる貴重な場です。

大好きな図書館を職場としては23年。登別市立図書館の館長としては、9年目を数えます。

登別市立図書館長として就任し

て2日目、移動図書館車『こぐま号』に添乗した私は、しんしんと降りしきる雪の中、多くの利用者がいたことに驚いたことを記憶しています。以前、働いていた図書館では、移動図書館車は、雨のときは巡回を中止していたからです。近年のインターネットの普及や書籍の電子化などにより、全国的にみても、図書館の利用者が減っている現状がありますが、登別市には図書館を愛する市民がたくさんいる。このことが、私にとって大きな支えとなっています。

図書館には、特に郷土に関する資料など、過去と現在を保存し、未来へ残していく重要な責務があります。市立図書館には、限られたスペースの中で、開館当初から関わってきた多くの人の熱意とともに、質の高い本や資料を取り揃えている自信があります。

きっと、市民の皆さんに『気持ち』を与えてくれる一冊がありますので、普段、本を読まない方も、ぜひ来ていただきたいと思います。また、市立図書館には、積極的な市民ボランティアが多く存在し、私が館長になってから図書館で行ったイベントの中には、市民の企画も多くあります。

この小さな図書館ならではの

『市民との距離の近さ』をさらに生かしていくためにどうすればよいか。

価値観の変化や多様化などに伴い、図書館に求められるものは多面的になっており、講演会やおはなし会などに参加して楽しいひとときを過ごす、一人で黙々と読書や勉強に励む、そうした場としてだけでなく市民が日頃の活動の成果を発表したりする役割も担っています。

図書館の魅力は、この懐の広さと深さにあると思うのです。

利用者それぞれがより豊かな時間を過ごすことができる図書館となるよう、地域にしっかりと根をはり、市民の皆さんと共に、市立図書館を育てていきたいと思えます。



▲市民の皆さんに図書館の利用方法などについて紹介する綿貫館長（ときめき大学基礎講座）